

聖ブレンドンの航海（1）

太古 隆治

本稿は中世ラテン語航海譚『聖ブレンドンの航海』（*Navigatio Sancti Brendani*）の邦訳である。聖ブレンドンはアイルランド初期キリスト教時代に活躍した聖職者で、同国を代表する聖人の一人に数えられる。また、この聖人が 17 人の修道士を率いて大西洋に旅立ち、7 年を経て「聖人たちの約束の地」に至った物語『聖ブレンドンの航海』は、アイルランドだけでなくヨーロッパ中に流布し、「中世のベストセラー」と呼ばれるほど広く親しまれてきた作品である。

聖ブレンドンについては、この作品のほか、その生涯を綴った『聖ブレンドン伝』（ラテン語で書かれた 5 種の版とアイルランド語で書かれた 2 種の版が現存し、ラテン語版を *Vita Brendani*、アイルランド語版を *Bethada Bréinninn* と呼ぶ）など数多くの伝承が残されているが、いずれも伝説的色彩が濃く、正確かつ詳細な歴史的ブレンドンを知ることは難しい。ともあれ、古くから伝わる各種の「年代記」や「殉教者録（暦）」などを参考に簡単にまとめれば、聖ブレンドンは 484 年にアイルランド西南部 Munster (Munster) 地方のトラリー (Tralee) で生まれ、557 年のクロンファート (Clonfert) など幾つかの修道院を創設し、577 年 5 月 16 日に 94 歳で亡くなったということである。

『聖ブレンドンの航海』の作者は不明で、成立年代も正確に確定するにはいたっていないが、作者はアイルランド人聖職者と推定され、9 世紀前半にはすでに書かれていたと言って間違いのないようである。現存する写本は 10 世紀のものから 17 世紀のものまで合計 125 に及び、その分布もフランス、ドイツを中心に北欧からイタリアまでヨーロッパの広い範囲を覆う。その一方、『聖ブレンドン伝』の写本はアイルランドとイギリスの 2 国に集中し、ラテン語版 5 種およびアイルランド語版 2 種を合わせた総数でも 33 写本にとどまる。また、ほとんどの版に『聖ブレンドンの航海』が取り込まれており、しかもその最も古い写本ですら 14 世紀のものでしかない。『聖ブレンドンの航海』を語らずしてブレンドン伝説を語れないと言って過言ではないだろう。

12 世紀以降『聖ブレンドンの航海』は俗語に翻訳（ないし翻案）され、さらに流布を拡大する。翻訳言語はフランス語、ドイツ語、オランダ語、英語、カタロニア語、イタリア語など多様で、オック語、古スカンジナビア語への翻訳も残されている。その先駆けとなったのがイギリスのノルマン王朝に仕えていた Benedeit の

フランス語（正確にはアングロ・ノルマン語）韻文訳である。12世紀はトリスタンとイゾーの物語やアーサー王物語など8音綴平韻形式の作品によりフランス宮廷文学が一気に開花する時代だが、Benedeitの韻文訳は同形式の最古の例にほかならず、フランス文学史においても貴重な作品とすることができる。Benedeitの作品は6写本でしか伝わっていないが、Benedeit自身が意図しなかった権威を認められたようだ。というのも、このフランス語版を典拠として訳したものとしか考えられないラテン語版が散文で2写本、韻文でも2写本確認されているのである。

『聖ブレンダンの航海』の中世における大成功は、ラテン語原典の現存写本数に端的に現れているが、皮肉なことにこの写本の多さが信頼のおけるエディションの公刊を遅らせる結果となった。すでに19世紀にJubinalを始めとし、いくつかの版が現れているものの、それらは限定された写本に基づき、また他の俗語版などとの抱き合わせで出版されたもので、『聖ブレンダンの航海』を代表しうるエディションを目指したものではなかった。ようやく1959年にCarl Selmerが本格的な校合に基づくエディション (*Navigatio Sancti Brendani Abbatis from Early Latin Manuscripts Edited with Introduction and Notes by Carl Selmer, University of Notre Dame Press, Indiana, 1959*) を公刊し、幾つかの修正をうながす論評もなかったわけではないものの、おおむね好意的に迎え入れられ、現在までこれが『聖ブレンダンの航海』の標準的テキストとなっている。拙訳の底本もまたSelmerのテキストである。

Selmerの『聖ブレンダンの航海』は1976年にはJohn J. O'Mearaによって英訳され、一般の読者にも手の届きやすいものになった。2002年に出版されたばかりのW.R.J. BarronとG.S. Burgessの編集による*The Voyage of Saint Brendan: Representative Versions of the Legend in English Translation*はO'Mearaの英訳を再録するとともに、俗語版の代表的テキストを集めており、これにより各種の版のあいだの異同を理解することが容易となった。

我が国でもすでに二つの邦訳が現れている。ただし、その一方はBenedeitのフランス語韻文詩の訳（松村剛：『冥界往來—『聖ブレンダンの航海』』、東京大学教養学部外国語科編『外国語科研究紀要—フランス語教室論文集』第39巻第2号、1991）、他方は1476年のドイツ民衆本の訳（藤代幸一：『聖ブレンダン航海譚—中世のベストセラーを読む』法政大学出版局、1999）であり、ラテン語原典の邦訳にはこれまで手がつけられていなかった。『聖ブレンダンの航海』は、現代においてもなお鑑賞に値する物語であるだけでなく、広くヨーロッパの文学と歴史を研究する者にとって貴重な資料である。拙訳がわずかなりとも諸氏に利することがあれば幸いである。

以下の邦訳は Selmer のテキストの全訳であるが、Selmer 版に対する書評に習って別解釈をした部分もある。章番号とその見出しはすべて Selmer のテキストに付されたものに従っている。固有名詞は原則としてラテン語表記に従う方針を取り、例えば、聖ブレンダンは常に「聖ブレンダヌス」と表記してある。訳語・訳文もできるかぎりラテン語の言い回しを尊重することにつとめた。しかし、冗長を避けるため«autem», «enim», «vero»などの繋ぎ語の多くは省かざるをえなかった。『聖ブレンダンの航海』にはアイルランド語からラテン語に置き換えられた固有名詞が数多く見られる。Selmer はこのうち地名をなぜか固有名詞として扱っていない（大文字表記をしていない）。本邦訳では、普通名詞との混同を避けるため、地名とみなされるものにはすべて鉤括弧（「 」）を付してある。また、これらの固有名詞のほか、解釈に関して説明を要する箇所、宗教用語、聖書からの引用などにはできるかぎり後注で説明ないし出典の明示につとめた。『聖ブレンダンの航海』はアイルランド初期キリスト教時代を生きた修道士たちの物語であり（旅の一行も修道士であれば、彼らが島々で出会う人々のほとんどがまた修道士である）、彼らの日常の営みが数多く語られている。それだけに聖書の内容に関わる部分や聖句の引用が随所に見られる。これらの引用は、当時の汎用聖書である「ヴルガタ」ラテン語テキストに基づいている。「ヴルガタ」は、現在の日本で一般に用いられている「新共同訳聖書」（日本聖書協会）と大部分変わるところはないが、「詩編」では順序にずれが生じている箇所や内容の異なる箇所がある。その場合には、「ヴルガタ」の出典箇所に続いて「新共同訳」の出典箇所を添えることとした。聖書からの引用の訳文については、「新共同訳」のものをそのまま採用させていただいた場合も少なくないのでお断りしておく。

なお、Selmer のテキストは 29 の章から成り立っているが、誌面の都合上、このたびは第 12 章までの邦訳を掲載し、残りは来年発行される『広島大学フランス文学研究 23』に回すこととする。

1. バリンドゥスの物語

聖ブレンダースは、アルタの後裔フィンロカの息子として、レーン湖のエオゲン氏に属し、ムメニアの男たちの国に生まれました¹⁾。厳しい苦行を行なった方で、数々の奇蹟により広く名を知られ、三千人もの修道士を集める父となりました。

聖ブレンダースが「ブレンダースの奇蹟の野」²⁾と呼ばれる地で戦って³⁾いたときのこと、ある日の夕暮れ時、ニアルの子孫で名をバリンドゥスという神父⁴⁾が訪ねてきました。バリンドゥス神父は、聖なる父に矢継ぎ早に言葉をかけられると、涙を流して地に伏し、そのまま長いあいだ折りつづけました。聖ブレンダースは神父を立ち上がらせ、接吻をして言いました。「神父よ、あなたが来てくださったのに、なぜ悲しみ合わなければならないのでしょうか。私たちの心を慰めるためにお出でになったのではないのですか。むしろ兄弟たちに喜びを分けてくださるべきではないですか。私たちに神の言葉を語ってください。そして、あなたが海で見えてきた不思議の数々で私たちの心を元気づけてください」

聖ブレンダースにこのように言われて、聖バリンドゥスはある島について話しはじめました。「私が名づけ親のメルノック⁵⁾という者がいて、キリストの貧しい民の世話をしていたのですが、隠者として暮すことを望み、私から去って行きました。そして「石の山」⁶⁾の近くに「美しき島」⁷⁾という名の島を見つけたのです。それから随分後のこと、メルノックのもとに大勢の修道士が集まり、神が彼を通してたくさんの奇蹟をお示しになったという話が伝わってきました。それで私は息子を訪ねるため旅に出たのです。三日の旅ののち、息子が兄弟たちをともなって私を出迎えにきていました。主が私の到着を彼にお告げになっていたのです。島に船が近づくと、あちらこちらの僧坊からまるで蜂の群れのように兄弟たちが出てきて、私たちのほうへ走ってきました。彼らの住まいは方々に散っていました。しかし、信仰と希望と慈愛において一つに結ばれ、同じものを食べ、いっしょに神の勤めを行っていました。食卓に出されるのは、果物と木の実、根菜と何種類かの香菜だけです。終課の後は、雄鶏が鳴くか鐘を打つまでめいめい自分の僧坊で過ごします。夜が明け、島のあちこちを見て歩いていた私を、息子は西側の海岸に連れて行きました。そこには船が泊まっていた。そして息子が言ったのです。「父よ、船に乗ってください、そして西の方角にある地、「聖人たちの約束の地」と言われている島に行きましょう。終わりの時、私たちに続く者たちに神がお与えになる国です」船に乗り込み出航したものの、一面の霧が私たちを包み込み、船の前も後ろもほとんど見えなくなっていました。ところが一時間ほど経つと、今度は巨大な光が私たちを包み、目の前に大地が現われました。広大で、果物が豊富な緑の大地でした。

船が岸に着くと、私たちは上陸し、十五日のあいだ島をくまなく歩きました。しかし、島の果てに行き着くことはできませんでした。花の咲いていない草はなく、果物の実っていない木もありませんでした。島の石はすべて宝石でした。十五日目、私たちは東から西に流れる河を見つけました。その様をつくづく眺めながら、どうしたものか迷ってしまいました。気持ちは河を渡るほうに傾いていました。でも神の導きを待っていたのです。このように二人で思案していると、不意にひとりの男の人が大いなる光輝に包まれて私たちの前に現われました。そしていきなり私たちをめいめいの名前で呼び、挨拶をして、こう言ったのです。「よくぞお出でになりました、善き兄弟たちよ。主は、ご自身の聖人たちにお与えになる地をあなたたちにお示しになりました。この河は島のまん中を流れています。向こうに渡ることはあなたたちには許されていません。だからもと来た道を引き返しなさい」その人が言い終えるいなや、私はどこから来られて、なんとというお名前なのか尋ねました。その人はおっしゃいました。「私がどこから来たのか、なんと呼ばれているのか、なぜ聞くのです。どうしてこの島のことを尋ねないのですか。この島は世界の始まりから、あなたが今見ているがままに、変わることなく続いています。食べものや飲みもの、そして着るものの必要を感じるでしょうか。あなたはこの島に入って一年になるのに、食べものも飲みものも口にしていません。眠気におそわれたこともなく、夜に包まれたこともないはずです。ここは常に昼で、闇が目をおおうことはありません。我らが主イエス・キリストこそこの島の光なのです」私たちはすぐに出立しました。そのお方も船が置いてある岸までいっしょに来られました。ところが、私たちが船に乗り込んだとき、なんとその人の姿は消えていました。私たちは、あの霧の中を通して「美しき島」に帰ってきました。兄弟たちは、私たちの帰りを大喜びで迎えてくれましたが、こんなに長く留守をしたことを嘆いて言いました。「父よ、なぜあなたたちの羊らをこの森に置き去りにし、羊飼もなくさまよわせたのですか。私たちは、修道院長がよく私たちを置いてどこかへ行かれることを知っています。どこにおいてなのかは分からないのですが、ある時は一ヶ月、ある時は二週間、また時には一週間かそこら、留守をされます」これを聞いて私は、彼らを安心させるために言いました。「兄弟たちよ、あなたたちは良きことのほかは何も考えることはありません。あなたたちは疑いなく楽園の門の前に住んでいます。夜が訪れることのない、昼が終わることのない「聖人たちの約束の地」と呼ばれる島がすぐ近くにあるのです。あなた方の修道院長メルノックはそこに行って帰ってくるのです。主の天使がそこを守っています。私たちが神の楽園にいたことに私たちの服の香りで気づきませんか」すると兄弟たちは答えました。「修道院長さま、あ

あなたが海のむこうの神の楽園にいらっしゃったことはよく分かります。でも、どこにその楽園があるのか私たちには知ることができません。なぜなら、私たちの修道院長が四十日を過ぎて帰ってこられたときですら、衣に芳しい香りが残っていることにしばしば気づくからです」その島に私は息子といっしょに二週間の間ずっと何も食べず何も飲まずにいました。それでも私たちの体は満たさされていて、人の目には、しほりたてのワインを心ゆくまで飲んだかのように見えたことでしょう。四十日後、兄弟たちと修道院長の祝福を受け、私の庵に戻るため仲間とともに帰途につきました。明日、その庵に帰ります」

聞き終わった聖ブレンダーヌスはすべての僧とともに地に伏し、神を讃えて言いました。「主はすべての道において正しく、すべての御業において聖なるかな⁸⁾。主はそのしもべらにこのような奇蹟を明らかにされた。主はその贈り物において聖なるかな。なぜなら、今日このような霊的なご馳走によって私たちを癒してくださいののだ。さあ行きましょう、体の力づけと新しい戒律に⁹⁾」夜が終わると、聖バリンドゥスは兄弟たちの祝福を受けて庵に帰っていきました。

2. 聖ブレンダーヌスと兄弟たちの集會

聖ブレンダーヌスは、ともに暮らす者たちの中から十四人の兄弟を選び出すと、いっしょに一つの礼拝堂にこもり、彼らに語りかけました。「あなたたちは私とともに戦う同士、私がおっとも愛する人たちだ。あなたたちの意見、あなたたちの助言を聞かせてくれ。私の心、私のすべての思いは、ある一つの望みに固まっている。もし神がそれをお望みなら、私はバリンドゥス神父が語った「聖人たちの約束の地」を探しにいくことを心に決めたのです。あなたたちにはどのように思われるか、どのような助言を与えてくれるのか」

彼らは、聖なる父の意思を理解し、声をそろえて言いました。「院長さま、あなたの意思は私たちの意思です。私たちは肉親を捨て、相続財産を卑しみ、私たち自身をあなたの手に乗せたではありませんか。生きようと死のうと喜んであなたの行くところについてまいります。私たちが求めるはただ一つ、神の意思なのです」

3. 聖エンダの島の訪問

これ故、聖ブレンダーヌスとその同士は、三日連続の断食を四十日の期間行ったのち出発することを決めました。その四十日はたちまち過ぎ、聖ブレンダーヌスは、兄弟たちに別れの挨拶をし、修道院の副院長—この人物はその後、聖ブレンダーヌスの跡を継いで院長になった—にすべてを委ね、十四人の兄弟とともに西の方向、

エンダという名の聖なる父がいる島¹⁰⁾に向け出立しました。そして三日と三晩その島に逗留しました。

4. 船の建造

聖なる父と修道士たちみんなの祝福を受けたあと、聖ブレンダーヌスは両親が住む故郷のはずれの地に向かいました。しかし、両親に会おうとはせず、海に向かって延びているとある山の頂上、すなわち現在「ブレンダーヌスの座」¹¹⁾と言われている場所にテントを張りました。そこには船が一そう入れる入り江がありました。聖ブレンダーヌスとその一行は、鉄の道具を取り、非常に軽い小型の船を造りました。この地方の作り方にしがたい、木で肋骨と支柱を作り、オークの樹液で赤く染めた牛の皮を船体に張ります。そして、外側から皮と皮の継ぎ目にバターを塗り込んでから、別の船二艘分の牛皮、四十日分の食料、船を被う皮に塗るためのバター、そして生活に必要なほかの品々を船に積み込みました。また、船の中央にマストを立て、帆とその他の操縦に必要なものを取り付けました。それから聖ブレンダーヌスは兄弟たちに船に乗り込むよう父と子と聖霊の名において命令しました。

5. 追ってきた三人

聖ブレンダーヌスがひとり岸辺に立ち、港を祝福していたとき、院長を追って修道院を出てきた三人の兄弟が現われました。三人は聖なる父の足もとにひれ伏し、こう言いました。「父よ、あなたの行くところに行っしょに行くことをお許してください。許してくださらないなら、何も食わず何も飲まずここで死にます。私たちは流浪の旅に生涯を捧げる決心をしたのです」神の人は彼らの苦しみを理解し、船に乗るよう命じて言いました。「望みのままにしなさい、息子たちよ」さらにこうつけ加えました。「私はあなたたちがどうしてやって来たのか分かっています。この兄弟は正しい行いをしてきたので、神はそれにふさわしい地を用意されている。しかし、あなたたちには恐ろしい裁きをお与えになるだろう¹²⁾」

6. 無人の島

聖ブレンダーヌスが船に乗り込み、一行は帆を上げ夏至に向かって¹³⁾船を出しました。順風に恵まれ、櫂を漕ぐ必要はまったくなく、帆を広げておくだけで充分でした。

十五日後、風が止んでしまったので、櫂を取り、力が尽き果てるまで漕ぎました。すぐさま聖ブレンダーヌスは彼らを力づけ励まして言いました。「兄弟たちよ、

心配はいらない。神が私たちを助けてくださる。神は私たちの船頭、私たちの舵取り、私たちを導いてくださるお方です。櫂と舵を中にしまいなさい。ただ帆は広げたままにしておきなさい。神がそのしもべと船をお望みのままになさるでしょう」力をつけ直す¹⁴⁾のはいつも日暮れ時でした。ある日やっと風が吹いてきました。しかし、その風がどこから来て、船をどこに運ぼうとしているのか皆目分かりませんでした。

すでに四十日が過ぎ、命をつなぐのに必要な貯えがすっかり尽きてしまったとき、北の方向に一つの島が現われました。非常に高い岩の島で、近づいてみると、岸は城壁のように高く切り立ち、島の頂上からは川の水が幾筋も海に流れ落ちているのが見えました。しかし船を着ける港¹⁵⁾がまったく見つかりません。兄弟たちは飢えと渇きで消耗しきっていました。少しでも水を汲もうと、だれもが壺をつかんでいました。聖ブレンダーヌスはその様子を見て言いました。「やめなさい。愚かなまねをしてはいけません。神はまだ私たちが入る港をお示しになっていないのです。それなのに盗みをしようというのですか。三日たてば主イエス・キリストが港と休む場所をお示しになり、苦しむ者らの体を癒してくださるのです」

三日の間その島の周囲をまわったあと、三日目の九時課¹⁶⁾になった頃、かろうじて船が一般入れる場所が見つかりました。聖ブレンダーヌスはすぐさま立ち上がり、その入り口に祝福を与えました。岩がけずられて、城壁のように高く左右にそびえていたのです。全員が船を下り陸に上がったとき、聖ブレンダーヌスはいかなる荷も船から下ろさないよう命じました。皆が海岸を歩きまわっていると、一匹の犬が小道を抜けて出てきたかと思うと、なんと飼い犬が主人の足もとに駆け寄るように聖ブレンダーヌスの足もとに駆け寄りました。聖ブレンダーヌスは兄弟たちに言いました。「神が良き使いを送ってくださったのでしょうか。この犬についていきましょう」聖ブレンダーヌスが兄弟たちといっしょに犬のあとを追うと、ある城に着きました。

城内に入ると、広間が見えました。広間は広々として、ベッドと椅子が置かれ、足を洗うための水までありました。皆が腰をおろすと、聖ブレンダーヌスは一同に命じました。「気をつけなさい、兄弟たちよ、サタンの誘惑に陥らないように。私の目には見える、修道院を出て私たちを追ってきた三人の兄弟のひとりに恥ずべき盗みを吹き込んでいるサタンの姿が。彼の魂のために祈ってやりなさい。肉体はもうサタンの手に墮ちているのです」一行が腰を落ちつけた館は、まわりの内壁のいたるところに、様々な金属でできた器のほか、銀打ちした手綱と角笛が架かっていました。

このとき聖ブレンダーヌスは、兄弟たちにパンを配る役目の召使いに言いつけました。「神がお送りくださった食事を運びなさい」召使いは言われてすぐに立ち上がりました。食卓、亜麻布、一人に一つの真っ白なパン、そして魚がそこにありました。すべてが運ばれると、聖ブレンダーヌスはその食事を祝福し、兄弟たちに言いました。「すべての肉体に食べものをお与えになる方、天の神に感謝しましょう」かくして兄弟たちが席につき、神に感謝の祈りを捧げていました。そうしていると同じように飲みものが、それも彼らが望んでいただけ、見つかりました。晚餐が済み、神の勤めを終えると、召使いが言いました。「お休みください。ほら、お一人お一人の寝床がすっかり整っています。働きづめの疲れきった手足を休めなければいけません」兄弟たちがぐっすり眠っているあいだ、聖ブレンダーヌスは悪魔の仕事を目にしました。手綱を手にした真っ黒な子どもが例の兄弟の前で戯れていたのです。聖ブレンダーヌスはすぐさま立ち上がり、祈りを唱えました。そして夜通し朝まで折りつづけました。さて、朝になり、兄弟たちが神の勤めに急ぎ、そのあと船の方に向かおうとしたとき、なんと前の晩と同じように食卓がすっかり整えられていました。こうして同じように三日と三晩のあいだ神はそのしもべたちに食事を与えられたのです。

7. 盗まれた手綱

このあと聖ブレンダーヌスは一行とともに再び旅を始めることにし、兄弟たちに言いました。「あなたたちの中にこの島から何か持ち出そうとしている者がいないか見なさい」すると皆は「父よ、私たちの旅を盗みで汚す者のなからんことを」と答えました。そこで聖ブレンダーヌスが言いました。「私がいつか言った兄弟が銀の手綱を懐に隠している。昨夜、悪魔が手渡したのです」その兄弟はこれを聞くと懐から手綱を出して投げ捨て、神の人の足もとに身を投げて言いました。「父よ、罪を犯しました。私を許してください。私の魂が減びないように祈ってください」これを聞くやいなや一人残らず地にひれ伏し、兄弟の魂のため主に祈りました。聖なる父が兄弟を起こしてやり、まわりの兄弟たちも身を起こしたとき、なんとその兄弟の胸から黒い子どもが飛び出し、大声で喚いて言いました。「神の人よ、なぜこの俺を七年のあいだ暮した住みかから追い出し、俺の相続財産から退けるのか」聖ブレンダーヌスはその声に向かって言いました。「主イエス・キリストの名においてお前に命じる、これから裁きの日までいかなる人間も冒流してはならぬ」

さらに兄弟の方を向いて言いました。「主の体と血を受け取りなさい、お前の魂はまもなく肉体を離れるのだ。ここがお前の墓となる。いっしょに修道院を出てき

た、そこにいる兄弟は地獄の中に墓を持つことになるだろう」こうして聖体をいただいたあと彼の魂は肉体を離れ、兄弟たちの見守る中、光の天使たちに受け取られたのでした。一方、彼の体は聖なる父の手でその場所に葬られました。

8. 世話人

かくして兄弟たちは聖ブレンダーヌスとともに船が残してある海岸に戻りました。船に乗り込もうとしていると、そこへ一人の若者がやってきました。若者はパンがいっぱい詰まった籠と水を満たした壺を持っていました。そしてこう言いました。「あなたがたのしもべの手から祝福をお受け取りください。あなたたちが安らぎを見いだすまで、まだ長い旅が待っています。しかし、今日から復活祭まで、あなたたちはパンにも水にも困ることはありません」祝福を受け取ったのち一行は大海に船を出し、二日に一度食事を取りながら航海を続けました。かくして船は様々な所を通り大海を運ばれていきました。

9. 羊の島

ある日のこと、近くに島が見えました。その島に向け漕ぎはじめると、恵みの追い風が吹いて助けてくれたおかげで、力いっぱい漕ぐまでもありませんでした。船が港に停まると、神の人は全員外に出るよう命じ、自らも続いて降りました。島をまわってみたところ、あちこちの泉から水が豊かに溢れ、たくさんの魚がいるのを目にしました。そこで聖ブレンダーヌスは兄弟たちに言いました。「ここで神の勤めを行ないます。今日は主の晩餐の日¹⁷⁾、神に穢れのないけにえを捧げる日です」そして一行はそこに復活祭の聖土曜日までとどまりました。

島を歩きまわっているあいだに、たくさんの羊の群れにぶつかりました。羊はすべて同じ色、すなわち白一色で、あまりの多さに地面が見えないほどでした。そこで聖ブレンダーヌスは兄弟たちを集めて言いました。「群れから祭りの日に必要なだけ取りなさい」兄弟たちは神の人の命令に従って群れに駆け寄り、すぐに羊を一頭捕まえて、その角に綱をつけました。羊はまるで飼いなされた羊のように綱の引き手に従い、神の人が立っている場所までついてきました。再び神の人が兄弟たちの一人に命じました。「群れから穢れのない小羊を取りなさい」兄弟は急いで命じられたとおりにしました。

翌日のお勤めのためのもろもろを整えていたところ、そこに籠を手にした人がやってきました。籠は灰の下で焼いたパンとほかの必要なあらゆる品で満たされていました。その人は籠を神の人の前に置くなり、聖なる父の足もとに三度顔をつけ

て言いました。「おお神の真珠よ、私めの手が作りましたものを召し上がっていただけるこの幸運はどこからやったきたのでしょうか」聖ブレンダーヌスは彼を起し、接吻して言いました。「息子よ、主イエス・キリストが、私たちが主の聖なる復活をお祝いできる地としてここを示されたのです」その人が言いました。「父よ、この聖土曜日¹⁸⁾はここで祝いなさいませ。復活をお祝いする徹夜祭と明朝のミサは、あちらに見えるあの島で行うよう神はお定めになっています」

このように話している間も、彼は神のしもべたちの世話をし、翌日に必要なものももの用意に取りかかりました。すべてが整って積み込みが終わると彼は聖ブレンダーヌスに言いました。「皆さまの船はこれ以上積みません。八日が過ぎましたら、聖霊降臨祭まで必要な食べものと飲みものをお届けします」聖ブレンダーヌスが「私たちが八日後にどこにいるかどうして分かるのですか」と尋ねると、こう答えました。「あなたたちは今夜、近くに見えるあの島に行き、明日の六時課¹⁹⁾までいらっしゃいます。その後また別の島まで旅をします。あの島からそれほど遠くない西の島で、「鳥の楽園」と呼ばれています。聖霊降臨祭の八日間²⁰⁾が終わるまでそこに滞在します」聖ブレンダーヌスはまた、この島の羊はなぜこれほど大きいのか尋ねました。というも牛よりも大きかったのです。彼は答えました。「この島には羊から乳を取る者はいません。冬に飢えるようなこともなく、昼も夜もずっと草地で過ごしています。それゆえこの羊はあなた方の国の羊よりも大きく育つのです」一行は船に戻り、互いに祝福を交わしたのち出航しました。

10. ジャスコニウス

向いの島までやってくると、まだ岸に着かないうちに船が止まりはじめました。聖ブレンダーヌスが兄弟たちに船を出て海に入るよう命じたので、兄弟たちは言われたとおりにしました。そして船の両側に綱をかけ、岸まで引いていきました。島は草らしいもののない岩の塊でした。この島で木は珍しく、岸边にはまったく砂がありませんでした。兄弟たちが外で夜を徹して祈っているあいだ、神の人はひとり船の中に座っていました。その島の正体が分かっていたからです。ただ、兄弟たちを怖がらせないようにだまっていたのです。

夜が明け、聖ブレンダーヌスが司祭たちに一人ひとりミサを歌うよう命じられたので、それぞれがそのとおりにしました。聖ブレンダーヌスも船の上でミサを歌っているあいだに、兄弟たちは塩漬にするために船から生肉を運び出しはじめました。また、前の島で取った魚も同じようにしました。運び終わると、鍋が火にかけ

られました。たき木が火に加えられ、鍋が煮えかかったとき、波が揺れるようにいきなり島が動きはじめました。兄弟たちは聖なる父の助けを求めて船に駆けもどりました。聖ブレンダーヌスは一人ひとり手を引いて、中に入れてやりました。島に上げたすべてを残したまま、一行は船を出しました。一方、島は海の上を動き続けていました。二マイル離れても火が燃えているのが見えていました。聖ブレンダーヌスは兄弟たちに島の正体を明かしました。「兄弟たちよ、何が起こったか見て肝をつぶしただろう」「びっくりしただけではありません。恐ろしい思いをしました」「息子たちよ、怖がることはない。昨夜、神が私の目にあの島の秘密を見せてくださった。私たちがいたのは島ではなく魚、海を泳ぐものの中でもっとも秀でた生き物なのだ。つねに尾を頭に合わせようと試みるものの、胴が長すぎてできないでいる。その名をジャスコニウス²¹⁾と言う」

11. 鳥の島

船は一行が以前三日を過ごした島の近くに来ていました。島の西の端に差しかったとき、狭い海峡を挟んで別の島があるのが見えました。島は花盛りの草や木でおおわれていました。一行は島を回りながら港を探しました。島の南側まで来たとき、海に注ぎこむ川を見つけ、その岸辺に船を向けました。兄弟たちが船を下りると、聖ブレンダーヌスは、船を綱で引き、行けるところまで川を遡るよう命じました。川幅は船の幅とほとんど変わりませんでした。聖ブレンダーヌスが船に座ったまま、このように一マイル遡ったところで、川の源である泉に行き着きました。そこで聖ブレンダーヌスは言いました。「見なさい、私たちの主イエス・キリストは、聖なる復活の祝いのあいだ私たちが過ごす場所をお与えくださった」また次のようにつけ加えました。「ほかに何も口にするものがなくとも、私は信ずる、この泉さえあれば食べるにも飲むにも充分だろう」

泉の岸辺に一本の木が立っていました。その木は周囲いっばいに枝を張り、またそれに劣らず高く伸びていました。たくさんの真っ白な鳥がその木を覆いつくし、あまりの数に葉も枝もほとんど見えなくなっていました。神の人はこれを見て、これほど多くの鳥が群がるようなことがどうして起こるのだろうかとおれこれ考え、答えを探しました。しかし、そうしているうちに疲れ果ててしまい、涙を流し、ひざまずいて神にすがりました。「神よ、知られざるものを知る方、あらゆる隠されたものを暴く方、あなたは私の心の苦しみをご存じです。あなたの威光におすがりします、あなたの大いなる慈悲によって、いま目の前にあるあなたの秘密をこの罪深い私に明かしてください。私がすがることのできるの私の能力でもなく、私の

尊厳でもなく、あなたの無限の慈悲なのです」

このように心に折り座りなおしたとき、鳥の群れの中の一羽が木を飛び立つと、羽を打って鈴のような音を出し、神の人が座っている船に向かって飛んできました。そして舳先にとまり、喜びを表わすかのように羽を広げると、柔和な顔をして聖なる父を見つめたのです。すぐに神の人は神が願いを聞き届けられたのだと思い、鳥に話しかけました。「あなたが神の使いなら、この鳥たちがどこから来たのか、どうしてこのような群れをなしているのか教えてください」

鳥はすぐに口を開きました。「私たちはいにしへの叛逆者²²⁾のあの大きいなる墜落に関わる者たちです。とはいえ、彼らにくみして罪を犯したわけではありません。私たちが創造されたちよどその折、叛逆者とその取り巻きが失墜し、それに巻き込まれて私たちも落とされてしまったのです。しかし、私たちの神は正義と真実のお方です。その大きいなる裁きにより私たちをこの地にお送りになったのです。私たちは罰に苦しむことはありません。ここで神の現前を目にすることができます。神は私たちを、反乱を起こした一味から遠ざけてくださっただけなのです。私たちは、使いとして送られる他の聖霊たちと同じように、空と天と地の様々な所をさまよいます。しかし聖なる日と主の日²³⁾にはあなたが今ご覧のこの体をいただいてここで過ごし、私たちの創造主を讃えるのです。ところで、あなたは、あなたの兄弟たちと旅に出て一年になります。まだ六年が残っています。そのあいだ毎年、今日祝った場所で復活祭を祝うことになります。そしてその後、あなたが心に定めたもの、すなわち「聖人たちの約束の地」を見つけるでしょう」こう言い終えると鳥は、舳先を飛び立ち、仲間のところに戻っていきました。

晩課の時刻が近づいてくると、木にとまっているすべての鳥がまるで声をそろえるかのように一斉に鳴きはじめ、羽をうち鳴らしながら歌いました。「シオンにいます神よ、あなたには賛歌こそふさわしい。エルサレムにいますあなたに誓いを果たします²⁴⁾」こうしておよそ一時間のあいだ同じ唱句を繰り返し歌い交わしたのです。そしてその調べと羽の音が耳にやさしく、神の人とその一行には嘆きの歌のように聞こえるのでした。

その時聖ブレンダヌスが兄弟たちに言いました。「今日、私たちの魂は神聖な食べ物で満たされた。次はあなたたちの体に力をつけなさい」夕食が済むと、神の勤めに取りかかりました。すべてが終わると、神の人と一行は第三夜警時²⁵⁾まで体に休息を与えました。目を覚ますと神の人は聖なる夜の祈りに取りかかるために兄弟たちを起こし、「主よ、わたしの唇を開いてください²⁶⁾」の唱句を歌いはじめました。神の人の祈りが終わると、すべての鳥が羽と口をそろえて言いました。

「御使いらよ、こぞって主を賛美せよ。主の万軍よ、こぞって主を賛美せよ²⁷⁾」
 そして、晩課のときと同じように一時間のあいだ休みなく歌い続けました。

空が明るくなると、「わたしたちの主、神の栄光がわたしたちの上にありますように²⁸⁾」を歌いはじめ、同じ調子で朝課の朗唱と同じ時間それを続けました。同じように三時課になると「我らの神に向かって歌え、歌え、我らの王に向かって歌え²⁹⁾」を、六時課になると「主よ、あなたの御顔の輝きで私たちを照らしたまえ、そして私たちを憐れみたまえ³⁰⁾」を、九時課になると「兄弟たちがひとつに暮すことはなんと良きこと、なんと喜ばしきことか³¹⁾」を朗唱しました。このように朝から晩まで鳥たちは主に賛歌を捧げたのです。かくして聖ブレンダースは八日目まで復活祭の祝いで兄弟たちを力づけました。

このようにして祝いの日々を過ごしたあと聖ブレンダースが言いました。「これまでは手と足を洗う水だけ必要でしたが、この泉から旅のあいだの飲み水をもらいましょう」とこう言ったとき、そこに例の人が食べものと飲みものを船にいっぱい積んでやって来ました。復活祭の前の三日間をいっしょに過ごし、彼らに復活祭の食事を与えてくれた人です。積んできた物をすべて船から降ろすと、聖なる父の前に来て言いました。「男たちよ、兄弟たちよ、ここに聖霊降臨祭の日まで十分な量があります。この泉の水を飲んではいけません。飲むには強すぎます。その水の力をお教えしましょう。これを飲んだ人はたちどころに眠りに襲われ、二十四時間のあいだ目を覚ますことはありません。泉の外に流れ出てはじめて、水の味と本性をもつのです」聖なる父の祝福を受けたあと、その人は自分のところに帰っていきました。

聖ブレンダースはその地に聖霊降臨祭の八日目までとどまりました。鳥たちの歌がみなを慰めだったからです。ところで、聖霊降臨祭の日、聖なる人が兄弟たちとミサを歌っていると、彼らの世話人が、祭りの日の勤めに必要なすべてをもってやってきました。いっしょに食事の席につくと、世話人が話しはじめました。「あなたたちにはまだ長い旅が残っています。次の年までもつよう、泉の水で壺を満たし、乾いたパンを持っていきなさい。私自身あなたたちの船が運べるかぎりのものを用意します」世話人は約束を実行したのち、祝福を受けて自分のところに帰っていきました。

一方、聖ブレンダースは八日後に、世話人が持ってきたものをすべて船に積み込ませ、すべての壺を泉の水で満たさせました。岸にすべての壺が運ばれてきたその時、例の鳥が飛んできて、船の舳先にとまりました。神の人は鳥が何か告げようとしているのだと分かりました。その時、鳥が人の声で言いました。「復活の聖な

る日と、ここで過ごしたこの時を、来年また私たちとともに祝いましょう。あなたたちは、今年の主の晩餐の日を過ごした場所で来年また同じ日を過ごすことでしょう。同じように、復活祭の主の夜もまた、かつて祝った場所—ジャスコニウスの背—で祝うことになるでしょう。また八ヶ月後には「アイルベウスの家族の島」と呼ばれる島を見つけ、そこで主の降誕を祝うでしょう」

鳥はこう言って元のところに戻っていきました。兄弟たちが帆を広げ、船を海に出しはじめると、鳥たちもまた声をそろえて「私たちの声を聞いてください、神よ、私たちの救い主、地のすべての果てと海の彼方の希望よ³²⁾」と歌いはじめました。

12. アイルベウスの家族の島³³⁾

このあと聖ブレンダーヌスはその家族とともに大海原の上をあちらこちらとさまよい、三ヶ月がたちましたが、空と海のほかは何も見ることはできませんでした。その間ずっと二日ごとまたは三日ごとに食事をとって力をつけました。

とある日、彼らの前方のそれほど遠くないところに島が現われました。ところが陸に近づこうとすると、風が彼らを岸から遠ざけてしまいます。こうして四十日の間、港を見つけられないまま、島の周囲を回り続けました。兄弟たちは船の中で泣きながら、救いの手を差し伸べてくださるよう主に祈りはじめました。というのも極度の疲労のためほとんど体力を失っていたのです。ところが、祈りを繰り返し、断食を続けて三日が過ぎると、かろうじて一艘の船が入れるだけの狭い港が見つかり、またそこに泉が二つあるのが見えました。泉の一つは濁っていましたが、もう一方は澄んでいました。兄弟たちは壺を持って我先に水を汲みに行きました。それを見て神の人が戒めました。「息子たちよ、この島に住む主人たちの許しもなく、そのような不正なことをしてはいけません。今あなたたちが人の目を盗んで飲もうとしているその水を、その人たちは喜んで分けてくださるでしょう」

かくして船を出て、どの方向に向かえばよいのか思案していると一人の老人が現われました。非常に威厳があり、髪が雪のように白く、顔が明るく輝いていました。老人は、神の人に接吻する前に、三度地面にぬかずきました。聖ブレンダーヌスと一行は老人を地面から起き上がらせました。かわるがわる接吻し合ったあと、老人は聖なる父の手を取り、いっしょに修道院に案内するまでおよそスタディウム³⁴⁾の距離を歩きました。修道院の門の前に来ると聖ブレンダーヌスは兄弟たちと足を止め、老人に尋ねました。「この修道院はどなたのもので、院長はどなたでしょうか。また、ここで暮している人たちはどこから来られたのでしょうか」聖なる父がこのように色々といひかけましたが、老人の口からは何一つ返事が得られません。

老人はただ、言いやうのない優しい表情を浮かべたまま、静かにするよう手でうながしていました。

聖なる父はすぐにこの修道院の決まりを悟り、兄弟たちに注意しました。「あなたたちの口から言葉がもれないよう気をつけなさい。あなたがたのおしゃべりによってこちらの兄弟たちが汚されるようなことがあってはなりません」こう注意したその時、十一人の修道士が出てきて、一行を出迎えました。聖遺物と十字架と詩編を持ち、次の章句を歌っていました。「神の聖人たちよ、あなたたちの住まいを出なさい、そして真実に向かって進み出なさい。この地を聖別し、住人を祝福し、そしてあなたたちのしもべである私たちの平安を守ってください³⁹⁾」この歌が終わると、修道院長は聖ブレンダヌスとその一行を一人ひとり接吻しました。同じように彼のしもべたちも聖なる人の家族に接吻しました。

たがいに平和を交わしたのち一行は、西の国々で行われるように兄弟たちが祈りを唱える中を修道院内に迎え入れられました。その後、院長は修道士らとともに客人の足を洗い、「新しい戒律⁴⁰⁾」の交唱を歌いました。それが終わると、沈黙を守ったまま彼らを食堂に案内しました。そして合図がひとつ鳴らされると、手を洗い、一同を席に着かせました。二つ目の合図が鳴らされると、修道院の父の兄弟たちの中から一人が立ち上がり、驚くほど白いパンと信じられないほど風味のある根菜を食卓の上に配っていききました。兄弟たちは客人と交互に混ざりあって席に着き、二人ごとに手つかずのパンが一つずつ置かれていききました。再び合図が鳴らされると、同じ給仕役が兄弟たちに飲みものを配っていききました。

修道院長が兄弟たちをうながしながら楽しげに言いました。「今日皆さんが盗んで飲もうとしていた泉の水だが、今は神への喜びと恐れとともに賞味してください。皆さんが見た濁ったほうの泉は、いついかなる時でも温かいので、兄弟たちが毎日足を洗うのに使います。一方、目の前のパンは、それがどこで作られるのか、誰が私たちの食事係のところ運んでくるのか分かっていません。私たちが知っているのは、神の大いなる慈愛により、近くのだれかの手で神のしもべたちに配られるということだけです。ここで二十四人が暮していますが、毎日、私たちの力づけに十二個のパン、つまり二人に一つのパンがもらえます。祝いの日と主の日には、神は一人ひとりにまるまる一つのパンをくださり、その食べ残しを夕食にあてることができます。あなたがたが来られた今日は、ふだんの二倍の食べものをいただいています⁴¹⁾。救世主はこのように、聖パトリキウスと私たちの父聖イルベウスの時代から現在まで八十年間、私たちを養ってくださっているのです⁴²⁾。そのあいだ私たちの体は老いも衰弱もまったく進んでいません。この島では私たちは火で調理

された食べものを必要としません。寒さ暑さに苦しめられることもありません。また、私たちは国を出るとき神意に従ってロウソクを持ってきましたが、いま教会の中にあるそのロウソクが、ミサや寝ずのお勤めの時間がくると火がとまり、朝まで燃えつづけます。しかも一本も短くならないのです」

皆が三度水を飲んだあと、修道院長がふだんするように合図を鳴らしました。すると兄弟たちは一様に沈黙と厳肅を守ったまま食卓から立ち上がり、二人の聖なる父に先だって教会に向かいました。彼らのうしろを聖ブレンダーヌスと修道院長も歩きました。兄弟たちが教会に入ると、残りの十二人の兄弟が出てきて、お二人の前までくるといそいそと膝を曲げて挨拶しました。聖ブレンダーヌスは彼らを見て言いました。「院長さま、この人たちはどうして私たちといっしょに食事をしなかったのですか」院長は言いました。「あなたたちが来られたからです。というの私たちの食卓は一度に全員を受け入れることができませんでしたので。これから彼らは力をつけます。彼らの食べる分も充分残っています。私たちは教会に入って夕べの祈りを歌いましょう。これから食事をする兄弟たちが私たちのあと夕べの祈りを歌う時間が取れなくなるといけませんから」

お二人が夕べの勤めを終えると、聖ブレンダーヌスは、教会の造りがどのようになっているか眺めはじめました。それは幅と奥行きが同じ長さの四角形で、七つの燭台があり、中央の祭壇にそのうちの三つを、また別の二つの祭壇に二つずつを配していました。祭壇は三つとも四角に切ったクリスタルで、祭壇に置かれた容器—すなわち、聖体皿、聖杯、水差し、またそのほかの祭祀に用いる器—もクリスタルです。また二十四の腰掛けが祭壇を囲んで置いてありました。修道院長が座る席は二つの聖歌隊席の間にありました。聖歌隊は院長について歌いはじめ、院長について歌い終えます。もう一方の聖歌隊も同様です。いずれの聖歌隊も誰ひとりとして院長より先に聖歌をはじめることはありません。修道院内では声や物音を立てる者は一人もいません。何か言いたいことがあるときは、院長の前まで行ってひざまずき、心の中で願いごとをします。すると聖なる父はすぐに書字板と石筆を取り、神の啓示によって何か書きとめ、指示を求めにきた修道士にそれを与えるのです。

こうした様子を眺めて聖ブレンダーヌスが感慨深気にしていると、修道院長が言いました。「父よ、もう食堂に戻る時間です。すべてが光とともに運ばなければなりませんから³⁹⁾」そして昼食のときとまったく同じように晩餐を取りました。一日の日課どおりすべてが終わると、全員が大急ぎで終課の祈りに向かいました。修道院長が「神よ、私を助けてください⁴⁰⁾」の唱句を歌いはじめ、同時に全員が三位一体に敬意を捧げたあと、次の詩節を歌いはじめました。「わたしたちは不正に

ふるまい、敵意をいただきました⁴¹⁾。敬虔なる父、主よ、わたしたちをお救いください。平和のうちにこそ身を横たえ、安らげますよう。なぜなら、主よ、わたしを希望の中に置いてくださったのはあなたなのです⁴²⁾」そのあと、この時刻に歌う決まりになっている祈りを歌いました。

詩編の朗唱が定められたとおり終わると、兄弟たち全員が客人をともない、外に出て、それぞれの僧坊に向かいました。一方、修道院長は聖ブレンダースと教会内にとどまり、光の到来を待っていました。聖ブレンダースは彼らの修道生活と沈黙について聖なる父に尋ねました。「どうしてこのようなことが人間の肉体にとって可能なのでしょうか」

院長は深い敬意と謙虚をたたえながら答えました。「父よ、我がキリストに誓って申し上げるが、私たちがこの島に来てから八十年になります。人の声は神に賛歌を歌うときを除いていっさい耳にすることがありません。私たち二十四人の間では指か目の合図によってしか言葉は交わされません。しかもそれも年長者によってのみ出されます。この地に来て以来、私たちは誰一人として肉体の病いや、人類の間を彷徨する霊の病いを覚えたことはありません」

聖ブレンダースは言いました。「私たちが今ここにとどまることは許されないのでしょうか」院長は答えました。「それはかないません。なぜならそれは神のご意志ではないからです。なぜ私にお尋ねになるのですか、父よ。私たちのもとに来られる前に、神はお示しにならなかったのですか、あなたが何をしなければならぬかを。あなたは十四人の兄弟とあなたの国に帰らなければならないのです。神があなたたちの墓を用意されているのはそこのです。一方、残りの二人のうち、一人は「隠修士の鳥」と呼ばれる鳥をさまようことになるでしょう。さらにもう一人はまことにむごい死に方をして地獄に送られるでしょう」

お二人がこのように言葉を交わしていたとき、その目の前を、火のついた矢が窓から入ってきて、祭壇の前に置かれていたすべての燭台に火をともしていきました。あっという間に矢が去ったあと、燭台には貴い光が残されていました。再び聖ブレンダースが尋ねました。「あの火は朝だれが消すのですか」聖なる父は答えました。「こちらに来て、その秘密を見てください。ほら、ご覧のとおり灯心が器のまん中で燃えています。でもいずれの灯心も焼けて短くなってしまふことはありません。また、朝になっても灰すら残っていません。これは霊的な光なのです」聖ブレンダースが尋ねました。「物体の中で非物体の光が物体のように燃えるとは、どうしてそのようなことが起こりうるのでしょうか」老師が答えました。「あなたもシナイ山の燃える柴⁴³⁾のことを読んだことがおありでしょう。あの柴も火にそこなわ

れることはなかったのです」

夜通し起きて朝を迎えると、聖ブレンダーヌスは出立の許しを請いました。老師は言いました。「いいえ、父よ。あなたは主の降誕を公現祭⁴⁴⁾の八日目まで私たちとともに祝わなければなりません」かくして聖なる父とその家族は、その時まで二十四人の父とともに「アイルベウスの家族の島」と呼ばれる島で過ごしたのです。

注

- 1) この冒頭の文は Selmer のテキスト では «Sanctus Brendanus, filius Finlocha, nepotis Althi de genere Eogeni, stagnili regione Mumenensium ortus fuit.» であり、「聖ブレンダーヌスは、エオゲン氏のアルタの孫フィンロカの息子として、ムメニアの男たちの湖沼地方に生まれました」と訳されるところであるが、Selmer のエディションに対する J. Carney の書評(*Medium Aevum* 32, 1963, pp.37-44) に従い、別訳を取った。なおムメニアは現 Munster 地方。
- 2) 「奇蹟の野 (saltus virtutis)」: アイルランド語の地名 Cluain Ferta (現 Clonfert) のラテン語訳。
- 3) 「戦って (in suo certamine)」: 祈りや苦行がキリストのための戦いと表現される。
- 4) 「ニアルの子孫で名をバリンドゥスという神父」: Selmer のテキスト では «quidam patrum ... , nomine Barinthus, nepos illius» (「彼 (聖ブレンダン) の甥で名をバリントゥスという神父」) だが、J. Carney に従い、ヴァリアントの «nomine Barindus, nepos Neil (Niall の属格)» を採用した。聖バリンドゥス (アイルランド名は Barrind) は Drumcullen の修道院長をつとめ、550 年頃没したと言われる。Barrind の名を残す地名 Kilbarron (<Cell Barrind, 'Church of Barrind') が Donegal 州 Ballyshannon の町の北にある。後に出てくるバリンドゥスの庵とはこの Kilbarron のことと思われる。
- 5) メルノック (Mernoc) はアイルランド語人名 Ernán の愛称。この人物は「アイルランドの聖人の系譜」に、Conall Gulban の息子 Fergus の後裔 Inis Caín ('fair Island') の Ernán と記されている (Carney, p.39)。
- 6) 「石の山 (mons lapidis)」: アイルランド語の地名 Sliab Liacc (現 Slieve League) のラテン語訳 (Carney p.39)。Slieve League はアイルランド北西部 Donegal 州 Donegal 市から西約 20km に位置する Kilybegs の町近くにある景勝地で、ヨーロッパ最大の断崖絶壁と言われる。
- 7) 「美しき島 (insula deliciosa)」: アイルランド語の地名 Inis Caín ('Fair Island') のラテン語訳 (Carney p.39)。
- 8) 「詩編」145.8 (「新共同訳」145.17)。
- 9) 「食事をする」の意で「体に力をつける」という表現が頻繁に用いられる。「新しい戒律」は、イエスが最後の晩餐でみずから使徒たちの足を洗ってやり、それを新しい戒律として守るよう使徒たちに言う逸話にちなむ (「ヨハネによる福音書」13.34: «Mandatum novum do vobis ut diligatis invicem» 「あなたがたが互いに愛しあ

うよう、あなたがたに新しい戒律を与える』)。

10) 聖エンダ (530 年頃没) はいとこの Oengus 王からアラン諸島の中の Arranmore を贈られ、修道院を創設した。そこでは多くの修道士が厳しい戒律のもと、労働、祈り、断食、聖書の学習の生活を送った。聖エンダの島は、数世紀にわたって西ヨーロッパの最も重要なキリスト教の中心地となり、アイルランドのみならず大陸からも多くの学僧が学びに訪れた。聖ブレンダンもその一人である。

11) Kerry 州の Dingle 半島にある「聖ブレンダンの山」がそれと言われる。

12) 聖ブレンダンは、三人の修道士のうちの一人を指して「この兄弟」と言い、残る二人を「あなたたち」と呼んでいる。

13) 「夏至に向かって(*contra solsticium estiuale*)」: 前置詞«*contra*»は「行為の向け先」とりわけ「方向/方角」を指すのに用いられるものであり、それゆえ「夏至」との組み合わせは解釈を戸惑わせる。これを古仏語散文訳の一つ(BN. fr. 1553)は«*encontre miedi*»(「南に向かって」)と、別の古仏語散文訳(BN. fr. 1716)は«*contre le soleil levant*»(「日の出の方向に」)と言い換え、方角を読むことでは一致するものの、指す方角は異なっている。「南に向かって」の読みはさらにヴェネチア語版にも見られる。一方、O'Meara はこの箇所を«*they began to steer westwards into the summer solstice*»と訳し、聖ブレンダンの旅立ちの方角を「西」と見なす。太陽がもともと北に位置する時が夏至であり、これから聖ブレンダンとその一行が訪れる島々が北大西洋上に位置づけられることから、訳者としては«*contra solsticium estiuale*»に「北に向かって」の含意を読み取りたいところであるが、他の含意の可能性を考え、あえて「夏至に向かって」の直訳を採用した。

14) 注 9) 参照。

15) 「港 (*portus*)」: 船を泊めておくことのできる入り江などを意味する。

16) 日の出から日の入りまでを 12 等分した 9 番目の時刻で、今日のおおむね午後 3 時。

17) キリストと十二使徒の最後の晩餐を記念する日。聖木曜日とも言う。

18) 聖週間 (受難週) 中の土曜日で、復活の日の前日にあたり、翌朝にかけ徹夜祭 (徹夜の祈り) が行われる。

19) おおよそ正午。注 16) 参照。

20) イエスの昇天の 10 日後に聖霊が使徒たちに降臨した (新約聖書「使徒行伝」1.8) ことを祝う祭日で、復活祭後 50 日目にあたり、八日間祝われる。

21) 「ジャスコニウス (*Jasconius*)」: 「魚」を意味するアイルランド語«*iasc*»をラテン語化したもの。

22) 墮天使 Lucifer への言及。

23) 祭日と日曜日。

24) 「詩編」64.2 (「新共同訳」65.2)。

25) 「第三夜警時 (*tercia vigilia noctis*)」: ローマ時代に遡る夜間の区分の一つ。ローマの兵制では日没から夜明けまでを«*prima vigilia*», «*secunda vigilia*», «*tertia vigilia*», «*quarta vigilia*»に 4 等分し、夜間の警備を交代させていた。第三夜警時は夜の 12 時から 3 時にあたる。

- 26) 「詩編」 50.17 (「新共同訳」 51.17)。
- 27) 「詩編」 148.2。
- 28) 「詩編」 89.17。
- 29) 「詩編」 46.7。
- 30) 「詩編」 66.2。
- 31) 「詩編」 132.1。
- 32) 「詩編」 64.6。
- 33) アイルベウス (Ailbeus) は Munster の守護聖人。Emly 司教として 528 年に没したとされる。ラテン語『聖アイルベウス伝』の一つ (ed.Heist) によると、聖アイルベウスはローマに渡って学問を深めたのち帰国し、ローマより聖パトリックが派遣される以前に、アイルランド全土で積極的な伝道活動を行っていた。聖エンダがアラン島に修道院を創設するのは、聖エンダに請われた聖アイルベウスの Munster 王 Oengus に対するとりなしによる。晩年に、Tele と呼ばれる大西洋上の島 (アイスランド?) に船出する決意をするが、Oengus 王があらゆる港を見張らせてそれを許さず、聖アイルベウスは 22 人の男を流浪の旅に送り出す。第 12 章で語られる「アイルベウスの家族」は、この聖アイルベウスによって派遣された修道士共同体と見なして問題ないだろう。また別の伝承に、24 人の修道士と「約束の地」で暮すために旅立ったとも伝えられている。
- 34) 約 185 メートル。
- 35) Selmer(p.87)によると、この章句は聖書の中には見当たらず、客を迎え入れる時に一列になって歌う、アイルランドの修道院固有の賛歌である。
- 36) 注 9) 参照。
- 37) これに類似する場面が、4 世紀後半に聖ヒエロニムスが書きあらわした『最初の隠修士パウルの生 (Vita sancti Pauli primi eremitae)』(上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集成 4』所収) に見い出される。砂漠の奥深くで隠修生活をおくる聖パウルスを聖アントニウスが訪問した場面で、二人の会話中にカラスが舞い降り、一塊のパンを二人の前に置いていったとき、聖パウルスが客人の聖アントニウスに「主は私たちに昼食を送って下さった。(…) 六十年このかた、私はいつもパンの半分の塊を受け取っていますが、あなたの到来に際して、主の二人の兵士に、キリストは糧末を二倍にして下さいました」と語る。
- 38) パトリキウス (Patricius) はアイルランドの守護聖人パトリック (389 年-461 年)。語り手の言葉によると、聖パトリキウスと聖アイルベウスは同時代人であり、この両者と旅の一行とあいだには 80 年の世代の開きがあることになる。
- 39) 『ベネディクトゥスの戒律』第 41 章参照:「夕べの祈りは灯りをともして食事をするにならないよう終えられなければならない。いかなる時も、夕食であれ正餐(昼食)であれ、日の光によってすべてがなされるよう時間が守られなければならない」
- 40) 「詩編」 37.23 (「新共同訳」 38.23)。
- 41) 「詩編」 105.6 (「新共同訳」 106.6)。
- 42) 「詩編」 4.9-10 (「新共同訳」 4.9)。

43) 「出エジプト記」 3.2 参照。

44) 灰の水曜日に始まる復活祭までの 40 日余り(正確には 46 日間)で、教会が定めた悔い改めの期間。40 日は日曜日などを含まない数字で、実際は 46 日間となる。この 40 という数は、イエスがヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受けた後、伝道へ旅立つ前 40 日間断食をしたことを受ける。また、モーセが十戒を記すためシナイ山にこもったのも 40 日間である (「出エジプト記」 34.28)。